



垂水の  
**太布  
鼓団**

発行 平成29年10月吉日





垂水区長  
山田 恒子

このたび、区内の伝統的な行事・文化・芸能の保存・継承を目的とした垂水郷土芸能保存会の活動におきまして、「垂水の布団太鼓」が発刊されることになり、大変うれしく思います。

垂水区においては、海神社の氏子地となる西垂水、東垂水、東高丸、塩屋の4地区に加え、舞子六神社の氏子地である旧山田村(現在の舞子)を加えた5つの布団太鼓が古くより伝えられており、毎年、これらの5つの布団太鼓が巡行し、各地で行われる垂水の秋祭りを盛大に盛り上げていきます。

現在では、時代の変遷とともに生活様式が大きく変化し、後継者不足が深刻化するなど、各地の伝

統文化を取り巻く状況は非常に厳しい状況にあります。

そのような中であって、各地の特色ある布団太鼓を克明に記録し、後世に継承する本誌の発刊は、意義深いことであり、垂水郷土芸能保存会の皆さんをはじめ、作成にあたって中心的な役割を果たしていただいた各地域の青年会の皆さんのご尽力に改めて感謝申し上げます。

この「垂水の布団太鼓」を読まれたすべての方々が、地域の歴史や伝統文化を再認識し、垂水に愛着と誇りを持っていただくことができるよう心から祈念いたします。



垂水郷土芸能保存会  
会長 川崎 聰和

皆様方にはご清祥の毎日とお慶び申し上げます。

このたび、垂水郷土芸能保存会において、垂水区の伝統行事の保存と継承のため、垂水の布団太鼓にかかる冊子を作成していくこととなりました。

作成にあたっては、各地域の皆様にも布団太鼓に関する資料をご提供いただくなど、多くのご協力をいただきました。

おかげさまで、垂水郷土芸能保存会としての冊子がまとまりました。

冊子の作成に関係された皆様方のご協力に感謝申し上げます。

本冊子が、今後、布団太鼓はもとより、古くから伝わる地域毎の伝統行事の継承に役立つことを願い、ご挨拶とさせていただきます。

目次

「ごあいさつ」	1
垂水村と布団太鼓	3
布団太鼓構造図・名称	5
西垂水布団太鼓	7
東垂水布団太鼓	9
東高丸布団太鼓	11
塩屋布団太鼓	13

西垂水布団太鼓の歴史	15
東垂水布団太鼓の歴史	16
東高丸布団太鼓の歴史	17
塩屋布団太鼓の歴史	18
舞子布団太鼓	19
舞子布団太鼓の歴史	21
ご協力者一覧・編集後記	22



# 垂水村と布団太鼓

明治22年の市制・町村制施行に伴い、明石郡垂水村が誕生した。

当時の垂水村にはいわゆる旧7か村(西垂水、東垂水、塩屋、山田(現在の舞子)、多聞、名谷、下畑)と呼ばれる大字が存在していた。  
現在の布団太鼓は、海神社の氏子地区である西垂水、東垂水、東高丸、塩屋にそれぞれ1台ずつ、舞子六神社の氏子地区である山田(現在の舞子)に1台存在する。



海神社



舞子六神社





●布団

平屋根の三段布団である。布団に刺繍が入るのは大変珍しく垂水の太鼓の特徴である。



●布団締め

帯の布団締めと綱の布団締めがある。



●昼提灯

龍や神社などの絵柄ある。かつては、夜提灯も存在した。



●水引幕

金糸などの豪華な刺繍が施されたもので、阿吽の龍などの絵柄が用いられる。



●高欄掛

豪華な刺繍で龍、虎、鯨、唐獅子、武者の退治物や合戦物がある。



●勅額

氏神様を祭る神社を掲げている。



●布団台

淡路型と三木型と呼ばれる布団台がある。



●半鐘

垂水の布団太鼓に半鐘がつくのは、東垂水の壇尻文化のなごりとされる。

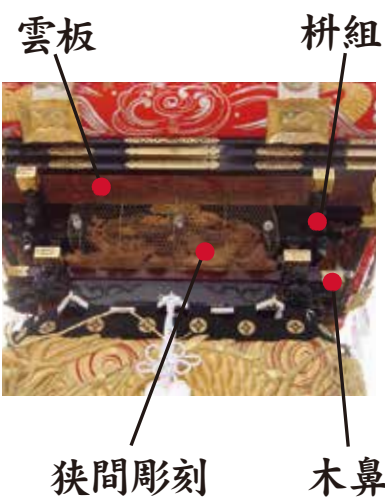
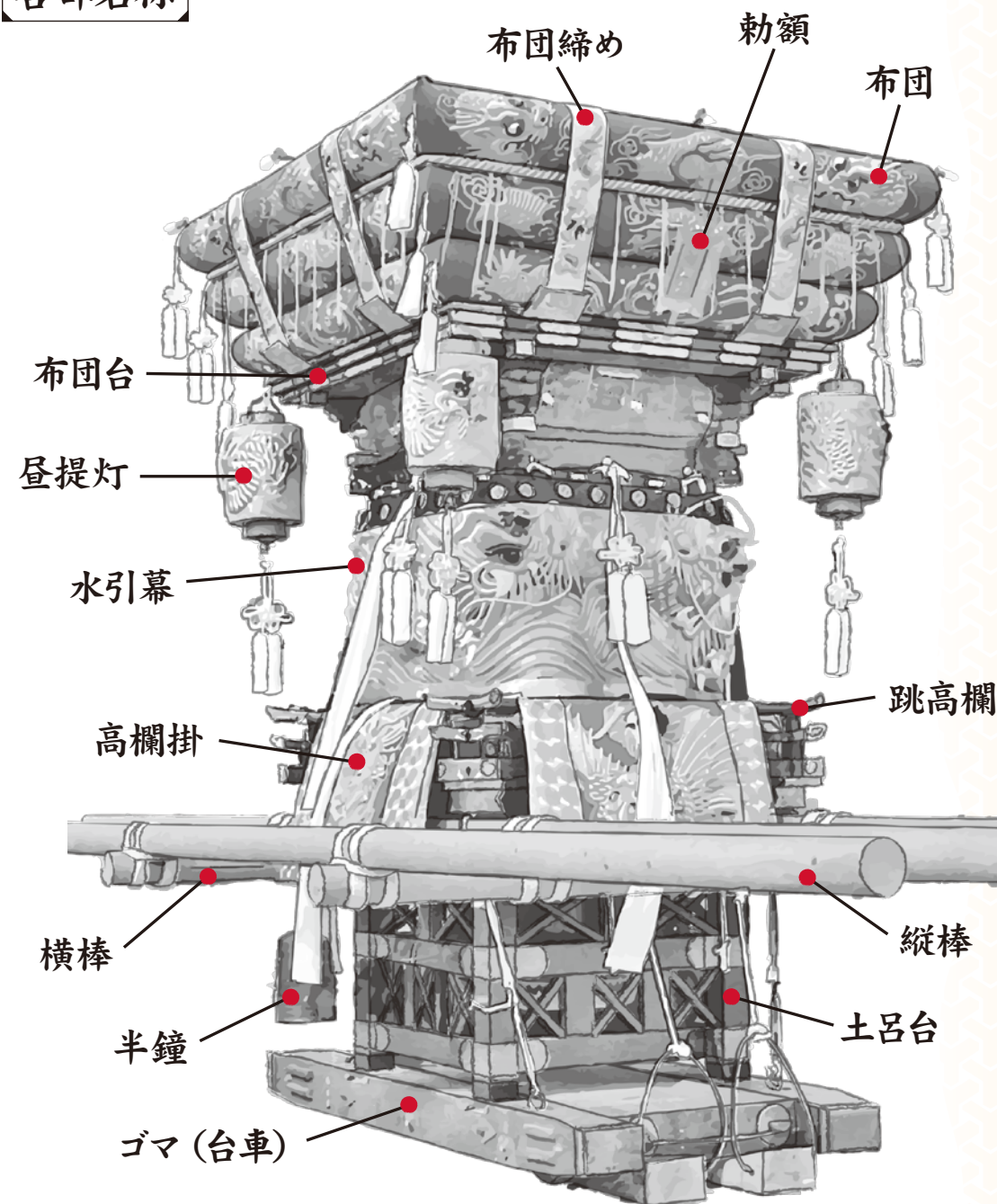


●土呂台

泥台とも呼ばれ、布団太鼓の土台となる。土呂幕の形状は、平格子、菱格子、まれには彫刻が施されたものがある。



各部名称



●ゴマ (台車)

布団太鼓は槽と台車に別れており、移動や豪快に走る時は、槽は台車にターンバックルで固定されている。前後にブレーキ係が配置されており、ブレーキは木製のウェッジをゴマの下に入れてスピードを調整する。ここが布団太鼓運行の心臓部である。



ゴマとよばれる木製で頑丈に造られており鋼鉄の六つの車輪が埋め込まれている。



ブレーキを吊っているロープの結び方が船のモヤイ結びと同じところが海の祭りの象徴である。

布団太鼓構造図・名称



齊藤実盛が稲の切り株に脚を取られたことで首を打たれ、その恨みで稲の害虫になった。故郷から由来した虫送りの音頭である。西垂水が漁業だけでなく農業も盛んであったことが伺える。



実盛  
の音頭  
稲の虫や  
おー共せー



● 正面挟間彫刻は吉田繁治作『天の岩戸』



● 布団の四面には『八大龍王』とよばれる八匹の龍の刺繍が施されている



● 西垂水の子供奉仕



● 水引幕は須磨細川作『阿吽の龍』



# 西垂水

黒檀、紫檀、鉄刃木をふんだんに使用した自慢の布団太鼓



西垂水の布団太鼓巡行は10月10日から12日の3日間練る。  
10月10日、「ヤーソーこい」の音頭とともに海岸通にある太鼓倉から出て布団太鼓の巡行が始まる。  
『さあよーいやーさー』の音頭で差し上げを行い、太鼓をゴマに載せ、霞ヶ丘、星陵台方面へ巡行する。  
11日は午前中に西垂水の鎮守である瑞丘八幡神社（通称八幡さん）に宮入する。  
午後からは子供奉仕である。「えーらいやっちゃー」の音頭で子供達と一緒に太鼓を引っ張り、垂水の商店街を巡行する。  
海神社への宮入は11日宵宮と12日日本宮に行く。  
12日は垂水レバンテ広場にて西垂水、東垂水の練り合わせを行い、祭りのクライマックスを迎える。







● 東垂水の布団太鼓は、三木型といわれる豪華な二段の雲板が特徴である



● 高欄掛では珍しいお城の図柄であり、これはかつて存在した『須磨の松岡城』である



● 平成18年に新調した二重透かうつとり彫りの跳ね高欄



● 昼提灯は『鯉』



浜の大鳥居を全速で曲がる練りは最大の見せ所である。

全速で相手の太鼓の手前で止める『寸止め』は棒鼻、プレーキ系の息の合った技である。



### 太鼓の練り

垂水の布団太鼓は、時に荒々しく、時に優雅に垂水の町を練る。全速で走る、曲がる、止まる、そして担ぎ天高く差し上げる。これが垂水の布団太鼓の特徴である。布団太鼓は、担ぎ手達の推進力、担ぎ棒の前後先にある棒鼻と呼ばれる担ぎ手の舵取り、プレーキ系の息の合ったタイミング、追子の音頭、拍子木これらがひとつになり練ることができる。



# 東垂水

かつての壇尻を彷彿とさせる  
豪快な走りの布団太鼓

東垂水の布団太鼓巡行は10月11日から始まる。  
10日の晩に肩合せと呼ばれる担ぎの練習を行う。  
11日の早朝、海神社の東側にある太鼓倉から出た太鼓は、笹を囃す追子の『そらーでつてこおーやあー』の音頭とともに国道2号線を全速で練り海神社へ向かう。  
海神社でお祓いを受けた後、再び国道2号線を東方面に『やっさーやっさー』の音頭で練り東垂水地区内を練る。  
午後からは子供達と一緒に太鼓を引つ張り垂水の商店街を巡行する。  
午後4時頃から東垂水、西垂水の布団太鼓が宮入に向けて馬場先と呼ばれる浜の大鳥居のある参道を練り試験曳きを行う。  
宮入は西垂水と同じ11日宵宮と12日日本宮で行う。







# 東高丸

梶内だんじり先代  
梶内近一氏作の布団太鼓



## 海神社への宮入

氏子4地区の太鼓が海神社へ宮入する。  
布団太鼓の宮入はにぎやかとして、  
氏子達が秋祭りを盛り上げるひとつとされている。  
宮入をするには、宮入之証が必要である。  
宮入之証は11日浜の大鳥居を一番にくぐる地区が  
海神社から受け取り宮入後次の地区に手渡す。  
宮入は大鳥居をくぐり国道2号線で  
右回りに一回差し上げ石鳥居をくぐり  
社殿前まで布団太鼓を持つてくる。  
平成28年の12日の宮入は  
東垂水、西垂水、塩屋、東高丸の順での宮入であった。

宮入之証



海神社へと  
続く馬場先  
(参拝道)



● 夜宮での海神社宮入



● 東高丸の子供奉仕



● 昼提灯は『二見ヶ裏の日の出』



● 高欄掛けは『甲賀三郎飛龍退治』

東高丸の布団太鼓巡行は東垂水の丘陵地にある養勝寺を拠点に10月10日から12日の3日間練る。  
現在東高丸に太鼓倉はなく、養勝寺に解体して保管している。毎年祭り前の休日に養勝寺境内にて布団太鼓の組立を行う。  
平成28年度は左記の日程で執り行われた。  
10月10日はジエームス山方面を巡行した。途中で塩屋の布団太鼓と合流して2台でイオンジェームス山に向かいイオンの広場で塩屋の太鼓と練り合わせを行う。「やーそーこい」の太鼓長の音頭でゴマから太鼓を外し担ぐ。「さーしまーしょ」の音頭で差し上げを行う姿は、豪快に走る布団太鼓とはまた別の表情が魅力である。  
11日は乙木小学校、東垂水小学校の校外学習の一環として児童達が「えーらいやつちや」の掛け声で太鼓を引っ張り、地域一体となって地元のお祭りを盛り上げる。  
12日は海神社宮入のため垂水に下りる。昨年は東高丸の夜宮での初めての宮入である。また四地区の布団太鼓が一同に会し垂水漁港で迫力の4台練りが行われ大いに盛り上がった。







●平成24年に新調した昼提灯は『阿吶の龍』



●本荘の布団太鼓から受け継いだ龍の布団締め



●本荘の布団太鼓から受け継いだ龍の挟間彫刻と鶴の雲板



●塩屋の子供奉仕



『うーとーけ、  
あーもーひとつこい、  
いおーてしゃんの、  
おしゃんのしゃんの、  
しゃんとこせー、  
ちやんこ、  
やーそーこい、  
やーそーこい』  
の音頭で終了する。  
途中に鳴り太鼓が入る。



### 太鼓の音頭

布団太鼓を練る時、  
『はーやっさ、はーやっさ』の太鼓長の音頭から始まる。  
そして追子の  
『そらー、でてこーおーい、やー』の  
音頭で太鼓が動きだす。  
追子と担ぎ手達が交互に  
『えーらいやっちやー』の音頭で太鼓を練る。  
布団太鼓を腕で担ぐ時は、  
『やーそーこい』の音頭で担ぐ。  
肩を入れ差し上げて担ぐ時は、  
『さあよーいやーさー』の音頭で担ぎ  
『さーしまーしよ』の音頭で差し上げる。  
『まーかーせ、まーかーせ、  
さあよーいやーまーかーせ』  
の音頭で肩に落とし担ぐ。  
布団太鼓の巡行を終える時は、

塩屋の布団太鼓は約半世紀間途絶えていたが平成21年に巡行を復活させ平成25年には海神社宮入も再開した。  
塩屋の布団太鼓巡行も例年10月10日から12日までの3日間練る。  
塩屋の鎮守である若宮神社のすぐ横に太鼓倉がある。  
10月10日太鼓長の『どーんてーんひとつ、どーんてーんふたつ、どーんてーんみつ、どーんてーんしーずーめーて』の音頭とともに『やーそーこい』で太鼓が太鼓倉から出て塩屋の太鼓巡行が始まる。太鼓倉から担がれた太鼓はゴマに載せジエムス山方面を巡行する。  
11日昼間は塩屋地区内を巡行する。  
夜、塩屋漁港にて翌日の海神社宮入に向けトレーラーに太鼓を載せ垂水漁港に向かう。昔は国道2号線を練り海神社へ宮入していた。  
12日、海神社への宮入である。浜の大鳥居の手前で太鼓をゴマから外し馬場先を担いで上がり宮入を行う。





# 西垂水布団太鼓の歴史

現在の布団太鼓は明治29年に日清戦争の戦勝記念に制作された。

西垂水村には、有栖川宮家の別荘（現在の舞子ビル）があったことから、小松宮彰仁親王様が書かれた勅額が海神社の社殿と西垂水の太鼓倉にあり、布団太鼓にも菊花紋章が使用されていることが大変興味深い。

材料は黒檀、紫檀、鉄刃木などの唐木をふんだんに使用しているためかなりの重量がある。

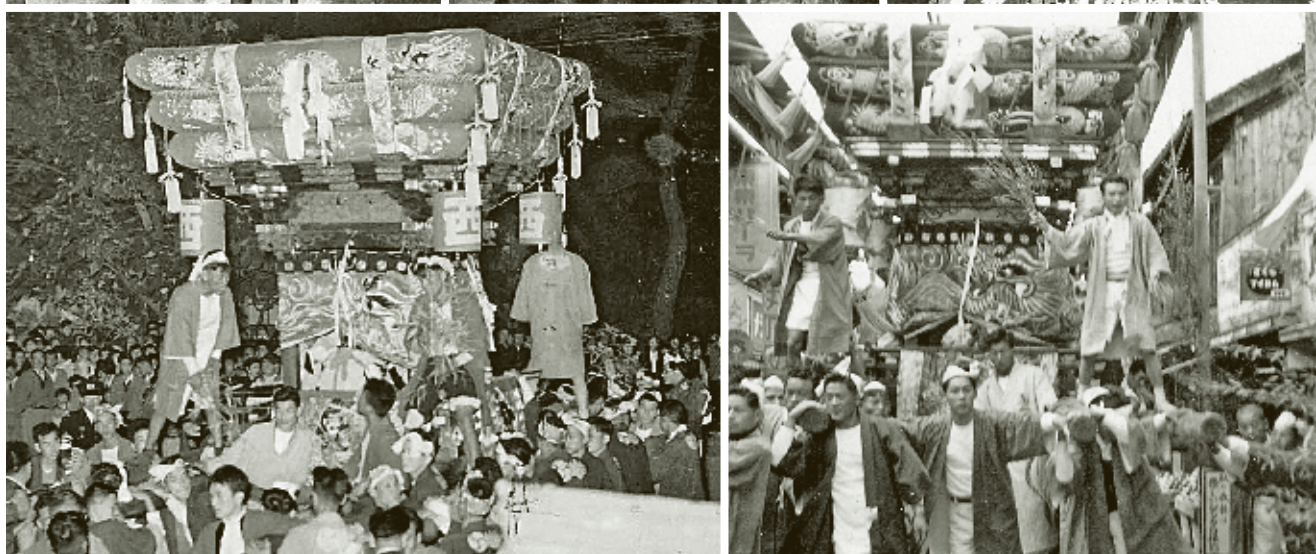
淡路島五色町の大工職人がやって来て西垂水村で布団太鼓を組み上げたそうである。

西垂水の太鼓巡行は、昭和30年代中頃諸事情により巡行を中断していたが昭和48年に復活して現在に至っている。

かつては神戸まつりや明石海峡大橋開通記念パレードにも参加した。



小松宮彰仁親王様が書かれた勅額



# 東垂水布団太鼓の歴史



明石市史の記録によると明治2年の岩屋神社秋の例大祭で明石城に20台の太鼓が集まった。そのうちの1台が東垂水の布団太鼓とされていることから、東垂水の布団太鼓巡行は、140年以上前から練っていると思われる。その先代の太鼓は明治38年頃に塩屋に譲った。

二代目はだんじりを淡路島から購入した。黒檀、紫檀、樺を使用した大変立派なだんじりであり、鳴り物は大太鼓、小太鼓、すり鉦、半鐘であった。

昭和33年頃まで練り、東灘区本住吉神社の西區に売却した。

三代目となる現在の布団太鼓は昭和34年に購入した。

その後何度かの改修により布団の刺繍、布団台の意匠を変更している。

平成18年の大改修では、布団、布団台、雲板、跳高欄等を新調した。





# 東高丸布団太鼓の歴史



東高丸の布団太鼓巡行は、昭和10年頃から始まったとされる。  
 先代の布団太鼓は、淡路島から購入して昭和29年頃まで練る。  
 現在の布団太鼓は二代目であり、昭和30年頃に淡路島梶内だんじりより購入した。  
 新調した衣装一式は、先代梶内近一氏の最高傑作だとされている。  
 その後布団締め、布団台、挟間彫刻等を新調して現在の姿になった。  
 海神社への宮入は昭和30年代中頃から国道の交通量増加によりなくなった。  
 その後は地区内のみでの巡行に留まり、布団太鼓を出さない年も何年もあり、昭和63年頃の巡行を最後にしばらくの間、中断されていた。  
 平成に入り、昔の担ぎ手のメンバー達が青年会を結成して、平成16年に布団太鼓巡行を復活させた。



# 塩屋布団太鼓の歴史

塩屋の布団太鼓巡行は明治38年頃東垂水の布団太鼓を譲り受けて始まったとされる。

当時は11日に午後から布団太鼓を出し瀧の茶屋から国鉄須磨駅付近までの国道2号線を練ったそうである。

12日の午前中に国道2号線を練り海神社へ宮入をした。昭和30年代中頃、国道2号線の交通量増加などの諸事情により海神社への宮入はなくなった。その後5年ほど塩屋の浜に11日と布団太鼓を飾っていたが、昭和43年頃に売却した。

平成20年、加古郡播磨町本荘地区の布団太鼓を購入、五段の布団が特徴的な布団太鼓であった。その年は塩屋の浜に飾り、平成21年より塩屋の布団太鼓巡行が復活した。その後平成23年に三段布団に新調、本体を大改修して現在の姿になった。



屋台のみが現存する先代の布団太鼓







# 舞子布団太鼓の歴史

舞子の布団太鼓の生い立ちは、資料保管倉が過去2度にわたり火災にあい紛失していることから完全な資料が現存しておらず、各人の語り継ぎによる。

舞子六神社の神輿は明治12年に再建している。同時に布団太鼓2台を新調したと思われる。

神輿と神輿を載せる台車は京都で作らせたのではないかとされており、その時期に布団太鼓の金刺繍を買い入れ、当時の青年会が開いた地域の若い衆総会で、総代会の方々の指示により、太鼓の幕・掛け幕(水引き)提灯等、龍の刺繍を台布に縫い付けたと聞いている。この作業は、約1年間に渡り、昼夜にかけて分担して行われたようである。

毎年、祭りは10月8日宵宮、9日大祭として巡行していた。

神輿は御所車に乗せ、その前後を布団太鼓がお守り

しながら地域全体を巡っていた。戦時中は一時中断されていたが、戦後の昭和22年に復活させ、今日に至っている。昭和30年代初頃まで、国道2号線が布団太鼓2台が東西に分かれ、練り合わせやぶつかり合いが夜遅くまで続き、祭りは大いにぎわっていた。このぶつかり合いでは、太鼓が早くなり、相手の屋根を狙って進み、屋根と屋根とが組み合う。一方の屋根が壊れて勝負がつくまで行つたと言う。

しかし、昭和30年代後半、延焼により布団太鼓2台や幕、その他一式が焼失してしまい、長年、神輿だけで秋祭りを行っていた。

現在、巡行している布団太鼓は、明石市旧七軒町の三枚布団太鼓であり、平成10年に岩屋神社の境内に長く置いていたものをそのまま譲り受けた。布団締め、水引き幕、高欄掛等も当時の岩屋神社の宮司より貰い受け

た。担ぎ棒は中八木から買入れ、大穴の空いていた太鼓は全面修理をして現在使用中である。まさに40年ぶりの復活であった。その後も西舞子町の皆様方からご賛助金を賜り、倉の改築、台車の購入、本体の修理等を実施していった。さらに、平成22年には平屋根型から半反り屋根型へと変えていった。

なお、雲板や挟間彫刻等は、松本義廣氏による明治39年作と記されており、今年で11年目の布団太鼓となる。巡行は、復活して2年程は、旧山陽道の往復のみで、国道2号線及び舞子多間線の通行はなかなか許可されなかった。3年目には、布団太鼓本体を屋根、土呂、台車と3分割してトラックに載せ、舞子会館前で再度組み立てなおして町内を巡行した。4年目に国道2号線を通り、西舞子2丁目から7丁目まで巡行することが可能となり、現在に至っている。



昭和30年代頃の先代布団太鼓



明石市旧七軒町当時の布団太鼓



## ご協力者(敬称略)

### 写真・資料等提供者

- 森行善彦 (海神社わたつみ会館写真室)
- 吉川純行 (西垂水地区)
- 松下源三 (西垂水地区)
- 瀬田川要治 (西垂水地区)
- 蓼原幸雄 (西垂水地区)
- 松下孝治 (西垂水地区)
- 信川隆 (東垂水地区)
- 山下寛 (東高丸地区)
- 富田隆義 (東高丸地区)
- 長谷川幸夫 (塩屋地区)
- 富士健二 (舞子地区)
- 塩屋百年百景

### 製作協力者

- 細川雅史 (西垂水青年会)
- 信川隆行 (東垂水青年会)
- 追立俊行 (東高丸青年会)
- 岸部克俊 (塩屋青年会)
- 酒井亮一 (布団太鼓舞子会)
- 西垂水財産区管理会の皆様
- 東垂水財産区管理会の皆様
- 東垂水北財産区管理会の皆様
- 塩屋財産区管理会の皆様
- 舞子財産区管理会の皆様

- 藤本庸文 (明石の布団太鼓プロジェクト)
- 谷林正紹 (兵庫県立西宮高等学校教諭)
- 黒田一美 (兵庫県会議員)
- 橋本嘉津雄 (西垂水地区)
- 森本政美 (東高丸地区)
- 辻本豊和 (東高丸地区)
- 梶内だんじり株式会社
- 海神社
- 舞子六神社
- 北川武志 (塩屋青年会 垂水郷土芸能保存会臨時会員)

## 編集後記

子供の頃から西垂水、東垂水の布団太鼓を見て育ち2台の布団太鼓が垂水の秋祭りを賑わせていました。

当時祖父から垂水にはかつて他に3地区の布団太鼓があり昔の秋祭りは大いに賑わっていたという話を覚えてます。

平成に入り舞子地区、東高丸地区、塩屋地区の布団太鼓が復活して年々垂水区の秋祭りが賑わいを見せています。この垂水の布団太鼓文化を後世に継承し、より多くの方に垂水の布団太鼓の魅力を発信していきたいと、垂水区の布団太鼓をまとめた冊子を作りたいとの思いに至りました。

冊子の作成にあたっては、垂水区役所にご相談させて頂いた結果、垂水郷土芸術保存会のお力を拝借することで実現に至りました。

冊子の作成に様々な形でご協力頂きました皆様にご場をお借りして厚くお礼申し上げます。

各地区の年長者の皆様からは、歴史や習わしなど大変貴重なお話を聞かせて頂きました。また各地区の青年会会長の皆様からは、お祭りを通して地元地域との絆や親睦を深め、世代交流や他地域との交流を図るなど、この布団太鼓を継承していくための工夫や将来的な展望を聞かせて頂きました。

昨年海神社では4地区が協力し合い、4台の布団太鼓が垂水漁港に一同に会し、練り合わせが行われるとともに宮入が行われました。実に約60年ぶりの出来事でした。

これからも、海神社4地区の青年会が協力するとともに、11年目を迎えた舞子の布団太鼓とともに、垂水の布団太鼓文化の保存と継承に努めてまいりたいと思います。

筆 垂水郷土芸能保存会臨時会員 北川武志

### 【編集・発行】

垂水郷土芸能保存会

平成29年10月

神戸市広報印刷物登録 平成29年度第214号(広報印刷物規格A-1類)

### 【おことわり】

記事の内容・年代・日付・場所などにつきましては、誤り・漏れのないようできるだけ確認しましたが、万一誤り・漏れなどがございましたらご容赦ください。

